折れた枠の下敷に

三川鉱災害　残された遺族四人

本紙一面の記事にもあるように十二日三川鉱で起きた災害のため払採炭員の堤政義さんが命を奪われた。

場所は、坑口から一万メートル以上も深くはいった、採炭切羽（地下約六百メートル）だった。本層西六十御西十五片下段払の終端入口。

災害が起きたのはその日の午後四時四十分頃で、その日堤さんが死ぬ刻までいっしょにいて、あやうく命を拾った志水重義さん（五十二歳。同じ払採炭員）は、そのときの状況を語った。

「私は堤さんと二人で、『ぬくかなア。ちょっと涼もう』といって風道（カマボコ型の坑道で、天井を大加背枠＝レール用の鉄に両側からページを当て、ボルトでつないだもの。重さ百キログラム＝ささえている）に出、しゃがんで話していました。カッター（石炭を削る）がさがってくるまで、ちょっとあったわけです。

突然、バチッという音がしたときにはもう、私は脇の方にすっ飛んでいました。

すぐうしろを見ましたら、今の今まで話しとった堤さんがいません。見まわしていたら、天井をきっきまでささえていた枠が落ちていて、その下敷になっている堤さんを発見したわけです。

かけよって、『堤さん、堤さん』と大声で呼んだですが、もう返事はありませんでした。

びっくりして、作業員に災害の起きたことを知らせ、係員に連絡して救出にかかったのでしたが……」

述べるまでもなく三池労組は十四日ストライキをうち、会社に抗議したが、堤さんは頭の上の天井をささえていた枠が真二つに折れて落ちたため、それによって体をはさまれ圧死したものと見られている。

遺族は妻の勝子さん（三十五歳）のほか、子どもと両親の三人。遺族のこれから先が心配されている。

その背景は？

今「貯炭」を口実にする会社の合理化攻撃がひどいしめつけとなって、職場の労働者を苦しめている。

「生産制限」「資材や経費の節約」「基準外労働圧縮」「定時内労働密度の強化」などがそれで、これまで基準外労働手当にすがりながら、かろうじて低賃金生活を維持してきた労働者は、とたんに生活が窮屈になり、そのうえ重労働にかりたてられる始末で、まさに泣きツラに蜂といった形。

だからといって「貯炭増」を口にされては、賃上げなどかけがえのない要求さえ、ついためらう気持になっては黙りこんでしまう。それが会社にとってはよいつけ目で、会社が「貯炭」を口実にあれほどくり返した「生産制限」はどこかえいってしまい、つい先ごろまでの三池全山での石炭の日産高が一万七、八千トンだったのに、現在はなんと二万一千トン。

現実に見られるこの結果は、「貯炭」を口実とした会社の合理化は「生産制限」などただ口先だけのことで、もともとのねらいはただひとつ、搾取率をさらに高めて俗にいう「縮少生産のなかでの利潤増大」にあったことを示す。

こんど払採炭員の堤政義さんの命を奪った死亡災害は、明らかに以上の背景から生まれたことで、会社側の責任はのがれられぬ。

再雇用制度を確立

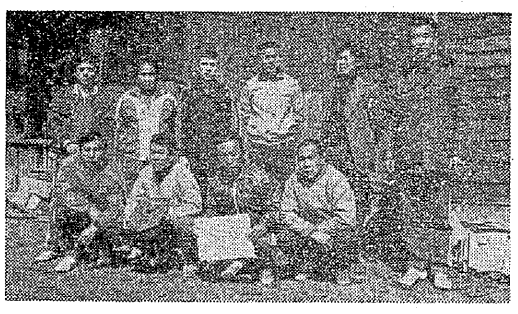
港務所、組合の要求で

先の労働協約、福利厚生の闘いのなかで、組合は港務指導部と固く結びながら、三池港務所に働く労働者の要求（たとえば再雇用制度の確立など）の実現をめざし、会社と交渉を積み重ねた結果、一部に問題点を残しながらもひとまず協定を勝ちとった。

要求は「再雇用制度の確立」「病弱者の取り扱い」や「配転」などについてのもので、特に重要なものは「再雇用制度」の確立だった。

その中心点を煎じつめていえば「通常業務に支障なく勤務できる男子で、本人が希望するもの」を再雇用する、というもの。その際賃金の八〇パーセントへダウンや年次有給休暇数を「再雇用一年経過後十二日」とするなど、三井東圧化学に比べるとなお開きは大きいが、一応の前進ということができよう。

写真上は、荒尾地評駅伝で〝最高年齢者賞〟を受彰する清水正一さん。胸のなかの思いは……？（写真は四山指導部・合瀬猛さん提供）下は二位に輝いた三川指導部チームの雄姿。（写真は三川指導部・津波古文男さん提供）



荒尾地評駅伝大会にぎわう

見せたゾ三池の底力

この力を春闘・地方選へ

春まだ浅い三月四日。〝七九国民春闘・統一地方選勝利〟をスローガンに、第六回荒尾地評駅伝大会が十二区間（全長二十一・一キロメートル）、十一チームの参加によって行われた。

三池労組からは三川と四山の両指導部から二チーム参加、第二位と第四位という優秀な成績を飾ることができた。

当日は前夜来の雨もあがり、冷たい風の中にも春の息吹きが感じられる絶好の駅伝日和に恵まれた。

午前十時荒尾市役所前をスタート。各選手は反合闘争、春闘勝利のゼッケンを風にはためかせ、伴走者や多数の沿道の声援にこたえながら力走。とくに今回は、有明消防組合の特別参加や、一区間を女性専用としたことなどのため大会の雰囲気もひときわ盛り上がり、また単組の応援もかってなく多く、白熱したレース展開となった。

統一地方選挙を目前にひかえ、荒尾地評が推せんする立候補予定者も全員勢ぞろい。そして車中や沿道から盛んな声援を送っては大会成功のため最後まで奮闘した。

大会終了後、荒尾市民プール前広場において表彰式が行われ、優勝した有明消防組合に優勝カップが贈られ、準優勝の三川指導部チームに準優勝杯が授与されたが、特に最高年齢賞として三川指導部の清水正一さん（五十四歳）が表彰されたときは、大会全参加者から一段と大きく鳴りひびく拍手が贈られ、三池労働者の底力に感嘆の声があがった。白鳩診療所の看護婦さんが、終始選手の健康管理に努力し、三池主婦会（四山）が湯茶の接待を行うなど、家族ぐるみの取り組みが今大会の大きな特徴となっていた。

最後に、地評会長の武島さんの音頭で「団結、頑張ろう」を三唱し、七九国民春闘・統一地方選挙へ向けて団結し、頑張っていくことを意志統一し、閉会した。

なお、当日の順位は次の通りであった。

一位＝有明消防組合（一時間八分一六秒）、二位＝三池三川指導部（一時間一四分七秒）、三位＝荒尾教組（一時間一六分二三秒）、四位＝三池四山指導部（一時間一六分四三秒）、五位＝国労。（以下は省略）

次の特別表彰も行われた――

▼花の一区賞（第一区の区間賞）＝中尾寛さん（有明消防組合）▼ゼッケン賞＝江崎静男さん（国労。反合闘争をアピール）▼安全運転賞＝荒尾タクシーチーム（最下位の十一位）▼ブービー賞＝市職労チーム（十位）

右の記事は、四山指導部の片山末吉さん提供。

×

組合員の皆さん、春闘やグループレクリエーションなどの手記を出し合いましょう。その際は、写真もどうぞ。

かわら版

春の足音

カランポン、カランポン
庶民のサイフ

×

三井化学労組大牟田支部の機関紙〝三化労〟の〝一筆啓上〟欄から紹介しました。さあ組合員に家族、新労組や社外工の仲間の皆さん、このあと皆さんの健筆で続けていただけませんか。

編集部

くじけてメタメタですが…

岩手　林　裕子

お元気ですか。また三池に行きたいと思います。次は私の〝にっき〟から。

×

2月○日　四日から絵をかきはじめた。モデルは路子。この二日ぐらい、何となくイライラしている。学習不足だと思う。自信がもてない。何を読もうかな。課題をみつけよう。

2月○日　夜の時、別居ぐらしがさびしい晩だ。長坂論文「教育とは何か」。近代日本の公教育は、資本主義のための民衆教育として成立し、整備された。

2月○日　今の仕事はつらい。自分の足りなさを子供らに毎日指摘されているようで、つらくなる。変わりたい、変わりたい。のんきで、あたたかーい人間になりたい。「せんせいけらいになれ」、読み終った。

2月○日　卒業式のとりくみで、音楽科の私はモウレツにいそがしい。夕方買物に行った。すみやきの煙のにおいがした。ゆうべの寝不足のため頭がいたい。

2月○日　「つらくてもくじけない」。なんとむずかしい言葉。くじけてくじけてメタメタだ。

2月○日　きのう具合が悪くて学校を休んだ。一日ねていた。「太陽の子」（著明な児童文学＝編集者註）読み終る。

2月○日　「労働者の団結論」読みはじめた。金のない労働者は金で結合することはできないわけで、結合するとすれば心と心をむすぶ外ありません。今頭の方も元気です。

×

林さんの右の〝にっき〟は、大牟田市宮原町二―六七の古川光男さん・同久代さんの夫婦（四山指導部）に寄せられたもので、お住まいは「岩手県九戸郡大野村七〇―六八―三〇」です。ありがとうございました。

三池の仲間を思っています

神奈川　松浦　卓

このところ関東地方は春をおもわせる暖かな日が続いておりますが、そのような時候とは裏ハラにわれわれをとりまく情勢はけっして容易なものではなく、なかなか厳しいものがあります。

COヨーカン、本当に有難うございました。五十歳になりましても酒はからっきし駄目で、私はかっての三池の仲間を思いうかべておいしくいただきました。

三池はCO闘争と合わせ、統一地方選挙の勝利を期し、日夜闘いのあけくれだと思います。

同封の金は、組合へのカンパにお願いしておきます。おいそがしいおからだ、返事はいりません。おからだに気をつけられて頑張って下さい。

×

大眉法対部長に寄せられた便りで、松浦さんのお住まいは「川崎市高津区諏訪二一五、青雲寮」です。どうもありがとうございました。

全国の皆さんへ

全国から組合・組合員のもとにたくさんのお便りをいただきますが、そのなかからこうしてご紹介しております。みんなというわけにまいりませんのでその点残念ですが、今後ともよろしくお願いいたします。

三池炭鉱労仂組合